

上海のドイツ・ユダヤ人(3)

— 序 説 —

山 下 肇

6 歴史の暮れがた

(「朝日」新聞寄稿の原文)

昨秋九月から三カ月、私は上海の復旦大学に滞在した。その九月に、上海市社会科学院の国際関係学会の一環として、ユダヤ学研究会の組織が正式に発足した。私はその幹部諸氏と会談する機を得たが、中の一人許歩曾氏(社会科学院情報研究所)は、ニューヨーク市大D. クランツラーの大著『ジャパニーズ・ナチス・アンド・ジューズ(ユダヤ人たち)』(1976年)¹⁾を翻訳中で、私にも熱心な協力要請があった。関係者間ではよく知られているこの著作には、「1938—45年上海のユダヤ難民コミュニティー」という副題が付いている。許氏には、ドイツ書H. シュテッカー『19世紀ドイツと中国』やトインビー等の訳業があり、氏の亡父許元方は中国随一の独漢大辞典の編者の一人であった。この辞書の顧問役だち比較言語学者ヴェルトフォーゲル(Weltvogel)も上記ドイツからのユダヤ人難民に数えられる。

その後11月に、私は日本総領事館に頼まれて、1938年11月9日ナチス・ドイツの有名な「クリスタルの夜」(Kristallnacht)五十周年にちなむ話をした。ユダヤ人の運命は亡命者、避難民、越境者の最たるもので、パスポート、ビザなど領事館との関わりが大きい。事実、当時の上海はこの大迫害の直後、ドイツ、オーストリア、東欧からのユダヤ難民が一挙に激増した。クランツラー著の副題もそれを物語っている。史上悪名とどろくこの「クリスタル」(ガラスが割られて飛び散る)の呼称は、今日のドイツでは忌避されて単に「ポグロムの夜」とか「十一月ポグロム」とよばれるようだが、当時の世界で、上海は残されたほとんど唯一の無国籍、無査証

入国の可能な国際都市であった。この人々の中からは、戦後渡米してカーター政権の財務長官となったブルメンソールのような人物も出ている。

注目に値するのは、同年12月6日、日本の近衛内閣が五相会議で「ユダヤ人対策要綱」三カ条を決定していることである²⁾。その主旨は、独伊両国との同盟関係に配慮しつつも、ドイツの極端な反ユダヤ政策にはくみせず、人種平等の精神を保持して、対米関係の悪化を避け、外資導入の経済建設を推進するため、「日満支」に來住するユダヤ人を公正に処遇する、というもので、明らかに「十一月ポグロム」のアジア波及に対応し、かつて日露戦争時米国ユダヤ財閥からの借款に成功した高橋是清のひそみにならうと平和外交の基調に立っている。もともと上海はアヘン貿易で巨利を得た英国（バグダッド）系ユダヤ財閥グループの手で西欧風都市の骨格がつくれ、更に第一次大戦前後シベリア経由で満州（現「東北」）地区に進出した白露系ユダヤ人が次第に上海に集結し、第三のユダヤ人としてナチスに追われたドイツ系難民たちがここに避難所を求めた。この三つ巴でまさに上海は国際関係のつぼと化したのである。

先般、私の関西大同僚シャウヴェッカー氏は神戸の古書店でたまたま1939年11月作成のポケット版「上海ドイツ系亡命者住所録」³⁾を発見した。約5,300世帯が登録されており、自治（互助）組織としての難民コミュニティの日々の営みの状況がよくわかる。日本人居住区だった虹口地区の一角に設定されたキャンプは、雨露をしのぐ窮乏に耐えながらも、ドイツ語イディッシュ語を日常会話とし、「小ウィーン」「小ベルリン」とよびあって暫時戦争終結を待ちわびる「待合室」のような和楽の場ともなった。しかし、41年12月の日米開戦と共に、和平の夢は画餅に帰し、キャンプは「ゲッター」の様相に変わり、ナチのゲシュタポ大佐マイジンガーが東京—上海を往復して圧力をかけるなか、難民たちはきわどいところでヒトラー「最終解決」の絶滅計画をまぬがれた。時すでにソ連軍がスターリングラード前から反攻に転じ、アウシュヴィッツ等を解放してその惨禍の報が上海の日本軍・官にも伝えられたからである。

戦後、「待合室」の人々は再び世界各地に離散し、各種回想録も生れたが、先年生き残りの有志が旅行団を編成して上海を再訪し、その思い出の記録が西独ARDテレビで放映された（1982年2月）⁴⁾。昨秋十月、この人

人はエルサレムで集会を催し、各国から百五十人も馳せ参じたことを、私は上海で知った（中国紙「参考消息」報道）⁵⁾。おそらくこの時期はユダヤ正月「仮廬祭」（収穫祭）に当り、「十一月ポグロム」五十年と重ねての記念集会であったろう。上海キャンプも日本軍の激戦跡に設けた、まさに「仮廬」の掘立小屋暮しであった。その地域を私も幾度か歩いてみた。かつて魯迅が放浪のユダヤ人やポーランドの動向に思いをはせつつ中国民衆の現実を凝視していたこと、そして今もその一帯に雑然と住む中国人たちが変らぬ「仮廬」のような生活であることを思いながら。

戦前の「満鉄調査部」は「猶太問題調査資料」というマル秘情報を三十余輯も出していた。綿密客観的でグローバルに反ユダヤ主義と対決するユダヤ人動向を追い、特に第十一輯『独逸系猶太人避難民ノ極東流入ニ就テ』（1939年1月）⁶⁾は「極秘」扱いだった。いまそれら満鉄調査部の膨大な資料類は大連の日本願寺本堂に山積みされ、未整理のまま眠っているという。日本の戦後も相変わらずこの問題は放置されたままで、ユダヤ体験の歴史をもたない日本人は免疫となる以前の無知無菌状態のまま反ユダヤの誤解や偏見にすぐ惑わされやすい危険をはらんでいる。

さきごろ亡くなった松本重治氏の『上海時代』は1938年末までの回想である。その終りに近く「日中戦争には、戦争遂行と和平への努力がほとんどつねに行われていたという特異性があった。それほど日本人と中国人には、切っても切れない、相戦ってはならぬという関係が、本来あるのだ」⁷⁾という一節が、五十年後の今日改めて心にしみる。ようやく上海の主人となったはずの、貧しい中国民衆は、今も日本領事館をとりまいて、「出国ブーム」の渦をつくりだしているのだろうか。近づく「大喪の礼」⁸⁾には、各国首脳にまじって、中国の銭其琛外相、イスラエルのヘルツォーク大統領も参列するという。歴史の暮れがたの後に「夜と霧」の来るような世界であってはならない、と考え続ける私である。（1989年2月23日「朝日」新聞夕刊——大喪の礼の前夜——の掲載稿は、紙面の都合でかなり削除部分が多いため、ここに改めてオリジナル稿を原文のまま掲げることにした。「歴史の暮れがた」という題名は、林達夫の旧著の書名を暗示するつもりで選んだ。林氏は同書に収めた稿を1939—42年の間に „Neinsager“ として書き、戦後1946年に筑摩書房から一冊にまとめたのである。）

7 ドイツ系ユダヤ人の大戦下上海生活の回想（下）

『オットーと呼ばれる日本人』（木下順二作）の「ジョンソン」のモデルだといわれるリヒャルト・ゾルゲ。この人物は、いってみれば、30年代のインタナショナルリズムの生きざまを一身を通じて描いてみせた人物です。久野収『ファシズムの中の1930年代』⁹⁾より

太平洋戦争の開戦とともに、上海難民キャンプの生活は急速に逼迫した。1941年12月以降、アメリカからの送金支払いは一切ストップし、難民のために十分な食糧も買えない困難に直面したからである。1万5千の人々が日々の食事を共同炊事に頼らねばならなくなった。古い裕福なセファルディム系先住ユダヤ人はほとんどみな英国の保護パスを持っていたが、日本軍は彼らの銀行預金を凍結して、月々必要な最少限の金額の引出しのみ許可することとしたから、従来のようなこの人々からの援助も期待できなくなった。

1942年1月、ユダヤ人の全グループは、この食事の問題解決のために、結束して一つの集会を招集し、カウフマン自身もこの事態の渦中の人となった。これまでの彼はコミュニティ関係の事柄にはあまりかかざらわることがなかったのである。救援委員会の月々の寄金を払いこみ、経験ゆたかな上海のビジネスマンとして、ユダヤ難民たちの社会復帰委員会の主席を引受けていた。開戦後は、日本側と提携していたすべての人が、ドイツ人も含めて、いわゆる「戦略」物資を官憲に申告せねばならなくなった。日本人は、必要とするものは押収して、敵側でない業者にだけ、不当に低い値ではあるが、一応の金を支払い、敵側、つまり英米国人には受領証だけよこした。カウフマンは無国籍だったから、彼に対してどうすべきか、日本人はよくわからなかったらしい。戦前には彼は、三井や三菱のような日本の大手商社とかなりの取引を進めていた。その古い縁故の助けで、彼は中立の扱いを受け、金銭の支払いも受けることに成功した。その結果、かなりの金額を動かすことが出来、ただひとりユダヤ難民救援の手をさしのべることも可能になった。そこで彼は救援のための共同出資組織の„Joint“の代表者にたいして、戦争終結後に支払われる債券のため、日本側から得た金を投げだした。それは一、二カ月の食糧購入に十分な額だっ

た。白露系ユダヤ人の数人も、没収された物資にたいし日本側から支払いを受けたので、後に彼の例にしたがった。やがて赤十字が日本を説得し、米国からの適正な支払いをスイス経由で受入れることができるまで、人々は何とかしてこれでのぐことができたのである。

この一事があったために、カウフマンは急にコミュニティの諸事に深入りせざるをえない羽目となった。人々は彼に強い圧力をかけて、ぜひともアシュケナジム系組織の副会長役を引受けるように迫った。実のところ、他の委員たちの誰ひとり英語を流暢に話せるものはなく、また、日本官憲との折衝にも英語に堪能なことが絶対必要であったから、彼もついにそれを拒むことができなかった。

カウフマンが犬塚海軍大佐と折衝しているあいだは、食糧用経費の例外は別として、大した問題は何もなかった。日本側が課した諸制約は主として「新規」難民にかかわるもので、1937年以前に来住した古参ユダヤ人は身の安全を感じていた。依然として各種ユダヤ人グループの共同はなかったのだが、「犬塚機関」とよばれた Jewish Affairs Bureau（以下JABと略記）が改組されてからは、ゲシュタポ将校たちの指導下で、全ユダヤ人に対し一段ときびしい規制が加えられるだろうという悪い噂がしきりに流れた。中国の新聞に反ユダヤ的論説が増大するにつれて、この噂は強まった。そこで遂にユダヤ人側でも新たに合同の委員会が組織されることになり、セファルディム系二人（ハイムとシュペールマン）、白露系二人（トバスとシッフリン）、アシュケナジム系二人（カルデッグとカウフマン）、それに秘書としてペリッツの七人衆が成立した。

それから暫くして、1942年7月、とつぜん委員会の緊急会議ということで、ハイムの事務所によばれた。カウフマンが到着すると、すでに芝田という名の日本人が来ていて、この人物は以前から旧犬塚機関に副領事として所属していた人だった。よく知った人で、いつもユダヤ側の問題にも同情を示してくれたことがわかっていた。彼は以前合衆国の領事勤務で働いたことがあり、二世の女性と結婚していたから、親米的な立場で、開戦に反対だった。彼が委員たちに話してきかせたのは、信じがたい、不安をよびます話だった。JABがその前日の会議で、ゲシュタポの圧力の下で、上海の全ユダヤ人——新来の難民だけでなく——を「抹殺」する決議をし

た、というのである。どのような方法でこれを実行するか、はまだ決っていないとのこと。ある者の提案は、全ユダヤ人（約4万）を老船に載せて公海に沈めることであり、他の案は、長江河口のほとんど無人の島崇朋島に食糧なしでユダヤ人を上陸させ、そこで餓死させるという。

芝田の説明では、新JABの大半のメンバーは、ゲシュタポの影響下にある熱っばいタカ派将校ばかりだ、とのことだった。彼らは、JABの全権委員として、日本の軍事議定書にしたがい、特に上級将校の承認を得ずとも、多くの決定を実行することができた。こうしたプランの実行を阻止するには、ただ一つしか道はない、というのが芝田の意見だった。つまり、もっと上層部とコンタクトをとらねばならないのだ。中国全体に指揮権を有する将軍、上海の海軍提督、上海憲兵隊の最高指揮官、あるいは東京の外務省の誰か責任ある高官に。

そこで委員会メンバーは、誰とコンタクトをとり得るかを相談した。白露系ユダヤ人たちは、支那方面軍総司令官の松井石根大將を、彼の前任地ハルビンでのポスト以来知っていたし、東京外務省のある高官とも親しい関係があった。彼らはこの両者と結びつきを得ようということになった。秘書のペリッツは従来の仕事の関係で、虹口地区を管理する日本海軍の将校数名を、開戦前から知っていた。

次に、憲兵隊にはどうやって近づくべきか、が問題になった。警察・情報勤務の位置から最も発言権をもつ憲兵隊は、最も不愉快な対象であり、一番難かしい相手だった。相談がここで行きづまったとき、芝田が助言してくれた。プランという名の古参のドイツ系ユダヤ人がある有力な日本女性と友人関係にあり、この女性を通じてなら憲兵隊の司令官に近づけるかもしれない、という。出席者の中で、カウフマン以外はみな、このプランを知らなかった。カウフマンは数年間同じドイツの商社（Reuter Broeckelmann & Co.）でこの人物と働いたことがある仲だった。そこで、プランと連絡をとり、事情を説明して、彼の繋がりを利用して憲兵隊長と話ができるよう説得することを、カウフマンは委託された。むろんすべては極秘裡でのことである。

翌日カウフマンはプランに逢って、この話をし、どんなことがあってもしこの情報の出処を洩らすことがあってはならないと釘をさした。でない

と、芝田の身が危険だからである。情報の流れたことが露見すれば、芝田が軍法会議にかけられることは必定。だから、この行動を起す理由としては、上海の新聞紙上で急激に反ユダヤ宣伝が活潑化したことを挙げるのが相談で一致していることも、ブラーンに伝えられた。新聞論調が反ユダヤ的施策の前ぶれであることは、真剣に憂慮されていた。

数日後にブラーンは召喚された。しかし、インタビューは期待と全くちがった方向に進展した。憲兵大佐で司令官の代理とおもわれる将校がブラーンに一部始終を語らせ、情報源がどこかを、被告に対するように尋問したのである。ブラーンは最初、委員たちの取決めを守って、反ユダヤ的な新聞論調が不安をかきたてたからだ、と説明したが、将校はいつもの日本流の激しい調子で彼をどなりつけ、彼に嘘をついた罪を責めたてて、真相を言わねば即座に逮捕拘引すると脅した。ブラーンは慄えあがって、カウフマンから情報を得たことを自供してしまった。そこで彼は釈放されたので、すぐさまこのインタビューの結果をカウフマンに電話してきた。

当面の二日間は何事もなかった。1942年8月末のことで、日蔭にいても約40度という猛暑のさなかだった。カウフマンは、自家用車のガソリンがもうなくなっていたので、自転車で六キロ離れた事務所から真直ぐに帰宅し、ベランダで頭に氷袋をのせて冷やしていた。そこへ二人の憲兵隊将校があらわれて、尋問のためあの悪名高い「ブリッジ・ハウス」の本部へ同行するように求めた。これはある程度永逗留になるかもしれないと直感して、洗面具を携行すべきかと訊くと、「いいようにしろ」という返事だった。

本部に着くと、すぐ数人の将校から尋問を受け、カウフマンがどうしてユダヤ人対策の行動計画を耳にしたのかを聞き出そうとするのが主眼のようだった。彼は、予めの相談どおり、反ユダヤ宣伝のため不安をかきたてられたという説明に終始した。芝田のこともユダヤ委員会の緊急会議のことも絶対に口にしなかった。将校たちはさかんに彼の嘘を責めたてたが、口を割らなかつた。二時間後に彼らは諦めて、本当のことを自白するまで拘留しておくぞ、と宣言した。

ブリッジ・ハウスの獄房には二種類あって、付属棟にある幾らかましな方の房が尋問のため召喚された者用のもので、重罪のかどで告訴された者

とは別になっていた。およそ十室くらいあったろうか、その各室に四、五人の虜囚が入れられていた。地上約半メートルの上に木造で、檻のように木格子を前側にはめ、背壁と側壁は固いコンクリート。主棟にある他の房は、中国人のゲリラ、スパイ、重罪人用で、造りは似ていたが、やゝ大きく、各房に男女25人から30人の囚人が収容されていた。

カウフマンはそのましな方の部分に、二人の中国人、闇商売で摘発された日本人一人、人違いの犠牲になり四週間後に釈放された一英国人と一緒に、入れられた。互いに話すことは禁じられ、日本流に終日床上にあぐらをかいて坐っていなければならなかったが、これはあまり厳密には守られなかった。日に一度だけ庭に出て15分間の散歩が許された。食事は朝は粥で、昼と夕は若干の野菜と米食だった。

翌日になると、ユダヤ委員会のメンバーが次々と全員、最後には芝田も、拘引されてくるのが、木格子ごしに見られた。各人別の房に入れられて、互いに話はできなかった。次の数日のあいだに各人が数回尋問に呼び出され、カウフマンだけは呼ばれなかった。最初に釈放されたのはシュペールマンで、彼はフランス租界の警察長官でヴィシー政府要人として知られた人物と友人だったので、日本側から同盟国に準じた友好関係を認められたのだろう。この人物がシュペールマンの保証人になってくれたのだ。二週間後には、エリス・ハイムの姿が消えた。英国側が彼を釈放するために、公式の交換者名簿にのせて、数日後には交換船「グリプスホルム」号でゴアに向けて出航することができた。

他の全員は残留せねばならなかったが、日に一度外部からの食糧をもらうことが許された。たゞし、カウフマンだけは引続き獄中の米の食事で満足せねばならなかった。

一週間後に、カウフマンは再び尋問に呼びだされた。もはや彼の頭初の証言をそのまま維持することは、無意味になっていた。事実を告白するしかなかった。なぜ最初から本当のことを言わなかったのか、と訊かれたが、緊急会議のことは言わないという約束を誓約どおり守ったのだ、と答えた。日本人は誰でも武士道の伝統を守るだろう。私もその通りのことをしたのだ、と。ユダヤ側は日本にたいして損害の及ぶような意図を全くもたず、たゞユダヤ人にたいして企図された処置から自らを守ることだけを念じた

のである、と。この立場は日本側も理解できたらしく、悪く受取られることはなかったようだ。しかし彼らは、日本人はお前が受取ったほど破廉恥な振舞いはできるわけがない、そんなことをすれば、武士道の哲学と掟に背くことになるからな、と説明した。だから、お前の方も嘘をつくべきではなかったんだ、と。カウフマンだけが外部からの食事を貰えないのは何故か、と訊くと、それは、嘘つきにたいする罰だ、という答えだった。お前はまた房に戻って、自分の「罪」についてよくよく考えてみるのだな、と。

一カ月が過ぎても、まだトバスとカウフマンだけが獄中にいた。カウフマンは体重をひどく減らし、たえず下痢に悩まされていた。もう抵抗力もなくなり、早く尋問を、と請求した。自分は重病だ、という苦情も申し立てた。なぜ他の連中と一緒に釈放してくれないのか、知りたかった。審問官は、本来の逮捕理由は何か、もうわかっているのか、と尋ねた。カウフマンはノーと言うほかに、自分らには日本人にたいし破廉恥なことを意図するところは毛頭なかった、とくりかえした。相手は、それは残念、と口を開いてお前を明日釈放するつもりだったが、お前にはまだ何も判っていないし、自分の犯したことを判ろうともしていないから、それが判るまではここに残ってもらわねばならぬ、と言った。カウフマンは必死になってまともな返答を求めたが、ふと日本人には「悪いデマが広がる」ことを極端に嫌う性向のあることに思いつき、自分はこの掟にぶつかったんだろう、と急いで口に出した。たしかに正体をつかんだのだ。審問官は、翌日帰宅を認めよう、と約束した。事実、釈放されたのである。その前に彼は、拘留期間中の彼の処遇に何も非のなかったことを証する署名をさせられ、彼のブリッジ・ハウス滞在と尋問に関して誰にも口外しないことを約束せねばならなかった。

トバスははるかに長く拘留させられた。その理由がどうしても定かでないのだが、カウフマンの推測によれば、トバスが1937年に蒋介石と国民党に関する書物を公刊したこととかかわっているようであった。日本側は彼を国民党側のスパイと睨んだのだろう。このグループの中で彼が最もひどい処遇を受けた、現実の唯一の被害者となった。六カ月後に釈放されたとき、彼は拘禁のために取返しのつかない重病に打ちひしがれた人間となっ

ていた。裏切者と見られた芝田はその職を失い、栄誉剝奪ののち日本へ強制送還された。

釈放後六カ月は何事も起らなかった。1943年2月に、日本側は、1937年1月以降に來市した無国籍ユダヤ系難民は全員、虹口地域内の一定の区切られた居住区、一種のゲッター、に移住せねばならぬ、という布告を公けにした。何人も外部に仕事をもつ証明のないかぎり、この区域を離れてはならない、外出の場合も朝7時から夕7時までの間に限定する。自家営業を継続することは認められず、ゲッターの門の通過証をもらうため、必ず登録済みの商社で働く証明書を持参せねばならない。この布告は、共同租界とフランス租界に定着した数千の人々がまことに貴重な営業空間と住居を何の補償もなく放棄して、ゲッターに移住せねばならないことを意味した。たゞし彼らの財産と商品倉庫は持って行ってもよく、多くの人々に可能な仕事をゲッター内でも続けることは許された。

日本側はゲッター住民に自警団をつくることを求めた。その団体は、中国のモデルにならって、「^{パオダヤオ}胞衛」と名づけられ、法定の閉店時刻の遵守、公共秩序の維持に責任をもたされた。全地域の周囲に鉄条網を張った塀がめぐらされ、ほんの僅かの出入口があるだけで、管理しやすくできていた。上海の他のすべての住民、中国人も「非敵性」の外国人も、ゲッターに出入りすることができた。まもなくそこには一連のナイトクラブ、バー、キャバレー、レストラン等も誕生し、外部よりもよほど楽しく過したり、よい食事をすることができた。

一般に日本人は、ゲッター住民が既定の規則を守っているかぎりは、大してうるさいことも言わなかった。たゞ住民が地区の外で働くために通過証を必要とするときには、いろいろ面倒があった。この証明担当の日本の管理官郷谷^{こうや}という男は特に感じの悪い、食えない存在で、申請する人々を遠慮なくぞんざいに取扱い、理由もなくよくビンタをくれたりした。もちろんいろいろと制限された規定の網をくぐろうとする試みもなされたわけである。多くの中国人、「中立国」の外国人、それどころかドイツ人たちでさえ、なかでもゲッターの外に生活するすべてのユダヤ人たちは、勤め口の証明をかべらの友人知人たちにきわめて寛容に分ち与えてくれたから、誰が実際に勤め先をもち、誰が芝居をしているのか、日本の役人には区別

が困難だった。

カウフマン自身は永年の定住者としてゲッターに住む必要がなく、彼の店を——ひどく弱体化した形にせよ——共同租界の一角で営み続けることができたから、そうした勤め口証明をたくさん提供し、人々はたいてい月に一度だけ、その証明の更新の必要なときに、彼の事務所にやってきた。布告に該当しないユダヤ人たちはみな、戦争の終るまで、日本の官憲からそれ以上悩まされることはなかった。

憲兵隊拘留から釈放された後、カウフマンはユダヤ人組織の副会長役を辞める決心をした。日本側は当初これに反対した。カウフマンは彼らの見方からすると、ブリッジ・ハウスの経験によって、この役職を一段とよく果すことができる能力を十分身につけたからだという。しかし、カウフマンはもっぱら「西部地区」^{ウエスタンディストリクト}に住んでいて、ゲッターから遠距離であり、交通手段の可能性がないからという理由で、結局辞職承認を説得したのだった。

上海のユダヤ人2万5千人が多く、の困難や障害にもかかわらず人命の大きな損失もなく戦争中をくぐりぬけることができたことは、本当に奇蹟である。大半の人々はろくに修理もされていない不健康な古い中国家屋に住み、しばしば炊事場もトイレもなく、冬の暖房もなく暮さねばならなかった。食べるものは、餓えを避けるだけのものはたしかにあったが、多くの人が戦争末期には栄養失調で苦しんだ。彼らは最少限の手段で、学校、病院、レストラン、ベーカリー、製服作業場、靴屋等々を備えた独立の共同体を創りだし、怖い疫病の発生も回避した。戦争終結の直前に、若干の住民が米軍機の爆撃で死亡したが、これは黄浦江の日本軍飛行場施設をねらったもので、遠くは離れていないゲッターに落ちてしまった悲劇であった。

戦後の日本では、上海のJABが実際に上海ユダヤ人の完全抹殺を計画していたことが明らかに浮上するようなドキュメント類が現われた。カウフマンたちは当時、およそ成功はつゆ予想しなかったにせよ、この計画を抗議行動で阻止したのである。彼がブリッジ・ハウスで知り合った日本の憲兵隊の通訳は——アメリカで暮らして、この仕事に狩出されて——戦後になってカウフマンに、反ユダヤの処置は抑制せよという命令が東京か

ら来ていた、と話してくれた。おそらくこの時期のスターリングラード前でのドイツ軍の敗北がある程度このことに関連していたことだろう。とつぜん日本人はドイツの勝利に不安を感じはじめたようだった。とにもかくにもユダヤ人たちは生きながらえて上海から帰ってきた。そのことが結局一番かんじんなことだった。

8 終 り に

以上でフリッツ・カウフマンの回想は終わっている。筆者自身は、6の「歴史の暮れがた」でも示したように、最近の上海滞在のおかげで、多くの資料と経験を更に加えて帰国したので、これらを集大成し総括してより大きな展望を拓くべき課題を背負っているが、当面する期限ではあまりにも忙中時間不足の実情にあるため、今回はひとまずここで擱筆させていただくこととしたい。

なお、上海のユダヤ人史としては、戦後の約十年間をも加えて、「待合室」（参考文献2参照）上海から世界各地へ改めて離散していくユダヤ人状況をも捕捉すべきであることを附記しておく。併せて、前回の稿までに掲げた文献資料以後、上海出発前と上海現地で入手しえた文献に関して、以下に簡単に列記し、拙稿豊富化のために他日を期したいと思う。

1. G. Kaminski u. E. Unterrieder: *Von Österreichern und Chinesen*. 1085s. Europaverlag, Wien 1980.
2. Suzanne D. Rutland: „*Waiting Room Shanghai*.“ *Australian Reactions to the Plight of the Jews in Shanghai after the Second World War*. Leo Baeck Institute, Year Book XXXII. London 1987.
3. Joseph C. Grew: *Bericht aus Tokio. Eine Botschaft an das Amerikanische Volk*. Overseas Editions, Inc. New York 1942.
4. Ben-Ami Shillony: *Politics and Culture in Wartime Japan*. Clarendon Press, Oxford u. Jerusalem 1981.
5. Tess Johnston: *A Consulate General and the Affair of the Stone Menorah*. Shanghai (復旦大学長謝希徳教授蔵) 1985.
6. 潘光旦: 『中国境内猶太人の若干歴史問題——開封の中国猶太人』北京大学出版社 1983.

7. Helmuth Stoecker: *Deutschland und China im 19. Jahrhundert*. Berlin 1958 (中国訳:『十九世紀的德国与中国』訳者許步曾。新華書店, 北京 1963)
8. Ruth F. Weiss: *Lu Xun. A Chinese Writer for All Times*. New World Press, Beijing 1985.
9. 中国社会科学院近代史研究所翻訳室:『近代来華外国人名辞典』中国社会科学出版社, 北京 1981.
10. 盛致和, 顧延培編:『上海市地名交通指南』, 上海文化出版社 1987.
11. 旧上海市街図(二万分之一)昭和12年版(復刻)
12. 『標準漢訳外国人名地名表』, (旧1924年版)復刻 1981, 東京 汲古書院。
13. 竹内実:『現代中国の展開』, NHKブックス 1988.
14. J. G. バラード著, 高橋和久訳:『太陽の帝国』, 国書刊行会 1987.
15. *The Constitution of Shanghai Judaic Studies Association*. 上海市国際関係学会猶太学研究会章程(理事長朱威烈)1988.
16. 満鉄調査部:『独逸系猶太人避難民ノ極東流入ニ就テ』, (ユダヤ問題資料第11輯)1939. 1. 30.
17. 満鉄調査部:『ラテン・アメリカニ於ケル猶太人概況』(猶太問題調査資料第34輯)1941. 10.
18. 東洋協会調査部:『事変下の上海概観』東洋協会 1939.
19. 上海恒産(株)編:『上海に於ける不動産事情』(第50話『上海の経済と猶太人』)1943. 4.
20. アバ・エバン(阿巴・埃班), 閻瑞松訳:『猶太史』(*Abba Eban: My People, The Story of the Jews.*)1985.
21. ハウクス・ポット, 帆足計・浜谷満雄訳:『上海の歴史』, 白楊社 1940. (F. L. Hawks-Pott: *A Short History of Shanghai*. 1928)
22. 鹿島健:米国に於けるユダヤ人問題, 同文館 1942.
23. *Wie Ost-Berlin die Geschichte der Juden neu schreibt. „Die Welt“* S. 18, 7. Sept. 1988.
24. 中山正善:『寧滬土産』(「ユダヤ人部落」の章あり)天理時報社 1943.
25. 野口久光:『戦時中の上海のおもいで』「ちくま」1988, 5月号。
26. *Chinesen im modernen China*. Verlag für Fremdsprachige Literatur, Beijing 1987 (『当代中国人』集文編, 外文出版社)
27. *Literatur und Kunst* (China-Buchreihe). Verlag für Fremdsprachige Literatur, Beijing 1985 (『文学芸術』中国概況双書, 外文出版社)

28. 鄭念, 篠原成子・吉本晋一郎訳:『上海の長い夜』上下巻, 原書房 1988.
29. 伴野朗:『上海便り』朝日新聞社, 1988.
30. 古賀嘉之:『北留楼先生上海だより』マルジュ社, 1988.

注

- 1) David Kranzler: *Japanese, Nazis & Jews. The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945.* New York 1976. 前稿(1)(2)の本文と注を参照されたい。
- 2) 前稿(2)の注12に「要綱」の全文掲載。
- 3) *Das EMIGRANTEN ADRESSBUCH SHANGHAI.* 前稿(2)の注9を参照。
- 4) 西独TV放映 „*Flucht nach Shanghai*“ に関しては, 前稿(2)179ページ以下と注16参照。
- 5) 中国紙「参考消息」1988年10月31号「上海落脚人暢叙昔日在滬生活」の記事報道。
- 6) 上掲の参考文献16を参照。
- 7) 松本重治『上海時代』下巻(中公新書1975)225ページ。
- 8) 本稿は昭和天皇の「大喪の礼」1989年2月24日の前日の朝日新聞に掲載された。大都市版は23日夕刊, 地方版は同朝刊。この時期は天皇とリクルート問題とで紙面錯綜し, 掲載期日もかなり遅延した。
- 9) 久野収『ファンズムの中の1930年代』リポート, 1986. 90ページ参照。リヒェルト・ゾルゲは学者としても一級の人物で, フランクフルト社会研究所の初期所員の一人であったし, ルカーチ, コルシュ, シュミツク等とも肩を並べる主役であった。
- 10) フリッツ・カウマンは明らかに「犬塚機関」の親ユダヤ方針を, 芝田通訳の行動まで含めて, 高く評価し, 日本軍部の反ユダヤ的傾斜をカウマン自ら渦中の人となって辛くも押しとどめる役を果たしたことを自負しているようだ。キャンプの日本人担当官郷谷のことは, 他の記録や回想にもしばしば触れられており, 根の浅い小役人, 小悪党として軽侮を含めてカリカチュアライズされている。

Deutsche Juden in Schanghai (III)

Hajime YAMASHITA

Mein Manuskript (III) besteht leider wegen der zeitlichen Einschränkung nur aus zwei Teilen. Der erste Teil ist das ungekürzte Original meines kleinen Artikels in der Asahi-Zeitung am 23. Februar 1989, worin es sich um die Ergebnisse meines Shanghai-Aufenthalts im letzten Herbst handelt. Das faßt das Exilleben der mitteleuropäischen Juden in Shanghai unter Verwaltung von Japan global übersichtlich zusammen, darin die heutigen Erinnerungsveranstaltungen aus jüdischer Seite an die Kristallnacht („*Novemberpogromm*“ 1938 usw. einschließend.

Der zweite Teil ist eine Einführung in den späteren Teil der „*Erinnerungen an die Juden in Shanghai im 2. Weltkrieg*“ von Fritz Kauffmann. Ende August 1942 mußte Kauffmann im Gefängnis von Kempeitai über 30 Tage verbringen, zum strengen Verhör mit seinen Tätigkeiten gegen den japanischen Judenvernichtungsplan.

Im Februar 1943 veröffentlichten die Japaner eine Proklamation, daß alle seit Januar 1937 angekommenen, staatenlosen jüdischen Flüchtlinge in eine Art Ghetto, einen abgegrenzten Bezirk innerhalb Hongkew ziehen müßten. Für die meisten von ihnen war es ein elendes Leben, aber doch wesentlich besser als in einem Konzentrationslager. Mit minimalen Mitteln schufen sie eine unabhängige Gemeinschaft mit Schulen, Krankenhäusern, Restaurants, Schneiderwerkstätten usw. darin.

Es ist wirklich ein Wunder, daß sie die 25 000 Menschen trotz der vielen Schwierigkeiten und Hindernisse ohne großen Verlust von Menschenleben durch den Krieg brachten. Wahrscheinlich hatte die

deutsche Niederlage vor Stalingrad zu dieser Zeit etwas damit zu tun, daß die Japaner tatsächlich die vollständige Vernichtung aller Juden in Shanghai nicht verwirklicht hatten. Kauffmann schreibt endlich, „Jedenfalls kamen wir mit dem Leben davon, und das war am Ende die Hauptsache.“